

子供たちに、世界とのつながりを感じさせるために、 同世代の外国の子供たちとつながる支援を行いたい ～(100人村ワークショップの実施 小学校6校)～

団体名●グローバルプロジェクトつなげたい隊 (GPT)

代表者名●廣井涼音 (人間科学部こども学科2年)

はじめに(背景・目的・目標)

近年の教育では、デジタル化とグローバル化が重要なキーワードとなっている。学校教育においても国際理解教育の充実やグローバルな視野の育成が求められており、このような背景から、将来教員を目指す学生としてこれらの教育課題に関わる実践的な活動に取り組むたいと考えた。

そこで今回の活動では、国際理解教育に関する知識や指導方法について自らの理解を深めるとともに、日本の小学生が世界に対して興味・関心をもち、グローバルな視野を身につけることを目的とした。また、児童が外国の同世代の子供たちとの交流を通して世界とのつながりを実感し、多様な文化や価値観への理解を深めることも目標とした。

これらの目的を達成するために、小学校へ出かけて行ってのワークショップ各校2回、ZOOM会議や掲示板 Padlet のオンラインサポートを行った。

活動内容

○対面ワークショップ

- 1) 世界がもし100人の村だったら(6回)
- 4) 台湾行ってQ 報告会(15クラス)

○国際交流オンラインサポート

- 2) ZOOM 会議サポート(15回+4回)
- 3) 掲示板サポート(15の掲示板)

1)「世界が100人の村だったら」ワークショップ

小学校6校(鞍月小、泉野小、金石町小、三馬小、みさき小、鞍月小)を対象に、国際理解教育の導入としてを実施。ワークショップでは、世界の人口構成や言語、生活環境などを100人の村に置き換えて体験的に学ぶ活動を行った。大学生は他国の人物になりきって登場し、児童には年齢・国籍・言語などが記載されたカードを配布した。児童はそれぞれの立場になりきって活動することで、世界の多様性や格差について理解を深めることをねらいとした。活動では、大陸ごとに人数を比較する活動や識字率・貧困に関するクイズを取り入れ、世界の現状について考

える機会を設けた。

児童に分かりやすく伝えるため進行方法や声かけを検討し、大学生が演じる役の設定についても、国は異なっても挨拶が共通する国を設定するなどの工夫を行った。カードを用いて役になりきる活動を通して、児童が自然と周囲と関わり合いながら学ぶ姿が見られた。特に、普段あまり関わりのない友達と協力する様子から、国際理解は身近な他者との関わりを通して育まれるのではないかと感じた。

2) オンライン会議(Zoom)や、掲示板アプリ(Padlet)を活用し、日本と台湾の小学生が学校生活や文化を英語で紹介し合う交流支援を行った。Zoom 交流では、学校生活や文化について英語で紹介する活動や、小グループで互いのことを質問し合う時間を設け、児童が既習の英語を用いて主体的にコミュニケーションを図る機会を設けた。大学生はコミュニケーションが円滑に進まない場合や通信上の問題が生じた際に支援を行った。

3) 掲示板(Padlet)での交流

掲示板上で写真や文章を用いて日常生活や学校の様子を紹介し合い、継続的に交流できる環境を整えた。これらの交流を通して、児童が知っている単語を用いて英語で伝えようとする姿勢を身につけ、外国の同世代の存在を身近に感じる様子が見られた。

4) 日本の小学校での台湾報告会

大学生が台湾の交流校を訪問し、授業(ワークショップ)を実施する機会をおこなった。日本文化体験として福笑いを英語で行い、英語で説明することに難しさを感じる場面もあったが、台湾の児童が楽しみながら参加する姿が見られ、文化を通じた交流の意義を実感した。

最後に、各小学校で台湾の文化や小学校の様子に関する報告会を実施した。報告会では交流校の紹介や児童からの質問への回答、写真や映像による紹介を行うとともに、VRによる台湾の観光地や授業の様子体験やドローンを用いた台湾訪問体験を取り入れ、児童が台湾をより身近に実感できるようにした。

成果、結果の考察

今回の一連の活動を通して、児童が世界の多様性に関心をもち、外国の子どもたちとの交流に前向きに関わろうとする姿が見られた。ワークショップでは、世界の人口構成や生活状況の違いに驚く児童が多く、世界を身近なこととして捉えようとする様子が印象的であった。オンライン交流では、知っている英単語や身振り手振りを用いながら相手に伝えようとする姿が見られ、コミュニケーションへの意欲の高まりが感じられた。また、交流校の文化や学校生活について積極的に質問したり、自分の学校との違いや共通点に気づいて発言したりする姿も見られ、異文化理解だけでなく自己理解や多様な価値観を尊重する態度の育成にもつながったと感じた。

一方で、この活動を通して大学生自身も国際理解教育に関する理解を深めることができた。児童に分かりやすく伝えるための工夫や声かけ、ICTを活用した交流の進め方など、国際理解教育を実践する上で大切な視点を学ぶことができた。また、児童と関わりながら活動を進める中で、国際理解教育の意義や難しさについても実感する貴重な経験となった。

今後の課題・展望

今後の課題として、100人村ワークショップでは発展途上国など世界全体に目を向ける内容が中心であったため、交流先である台湾についても関心を高められるような活動を取り入れる必要があると感じた。また、台湾報告会におけるVRやドローンを活用した活動は実施できた小学校に限られていたため、日程調整や呼びかけを行い、より多くの小学校で実施できるようにしていきたい。

さらに、台湾の児童との交流では、自分の考えを英語で伝える難しさを感じる場面もあったことから、円滑なコミュニケーションを図るために英語力の向上にも継続して取り組む必要がある。今後はこれらの課題を踏まえ、より充実した国際理解教育の実践につなげていきたい。



100人村ワークショップ（全校生徒）



台湾の小学校でおこなった福笑い絵ゲーム



日本の小学校での台湾報告プレゼン